

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 兵庫県神戸市中央区下山手通5-10-1
管理機関名 兵庫県教育委員会
代表者名 教育長 西上 三鶴 印

令和2年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業に係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

令和2年6月30日(契約締結日)～ 令和3年3月31日

2 指定校名・類型

学校名 兵庫県立佐用高等学校
学校長名 西坂 美樹
類型 プロフェッショナル型

3 研究開発名

「食」を通じてローコスト・ハイクオリティ社会の実現を目指すプロフェッショナル人材の育成 ～佐用風土(Sayo Food)を活用したモデルプランの構築～

4 研究開発概要

本研究は「食」を中心に①特産物による商品開発②健康寿命の延伸③安心・安全な町づくりの三本柱で展開している。これまでも特産品を使用した商品開発には取り組んできたが、事業を通じて伝統料理、保存食へと発展させる目的がある。販売が主目的ではなく、「食」を通じて「佐用風土(Sayo Food)」と地域人材を活用し、健康の見直しや災害の時対応などで町を活気づける。その中で、伝統料理や保存食を「高校生訪問サービス」等の実習で高齢者に提供するなど地域と協働するために、履修科目の新規充実を図り、学校設定科目の活用でカリキュラム・マネジメントを行い、生徒の学びを深め地域課題の解決につなげる。

5 学校設定教科・科目の開設、教育課程の特例の活用の有無

- | | | | |
|-------------|--------|---|---------|
| ・学校設定教科・科目 | 開設している | ・ | 開設していない |
| ・教育課程の特例の活用 | 活用している | ・ | 活用していない |

6 運営指導委員会の体制

氏名	所属・職	備考
西田 利也	兵庫県教育委員会 高校教育課長	学校教育に専門的知識を有する者
服部 憲靖	佐用町役場 企画防災課長	関係行政機関の職員
浅野 博之	佐用町教育委員会 教育長	学校教育に専門的知識を有する者
岸田 恵津	兵庫教育大学 教授	専門的知識 (生活科学等)
田和 久典	IDEC 株式会社 グリーンソリューション事業部長	学校教育外部有識者 (産業)

7 高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者
兵庫県教育委員会	高校教育課参事 桂 敦子
兵庫県立佐用高等学校	校長 西坂 美樹
佐用町	町長 庵途 典章
佐用町教育委員会	教育課 教育推進室長 大野 公嗣
IDEC 株式会社	社長 船木 俊之
ナニワフード株式会社	社長 松田 良彦
島根大学	教授 作野 広和
兵庫教育大学	教授 永田 智子
日本調理専門学校	校長 水野 博
美作市スポーツ医療専門学校	校長 黒瀬 通弘
兵庫県立山崎高等学校	校長 武田 由哉
佐用町自治会連合会	会長 井上 洋文

8 カリキュラム開発専門家、海外交流アドバイザー、地域協働学習支援員

分類	氏名	所属・職	雇用形態
カリキュラム開発専門家	作野 広和	島根大学 教授	非常勤
カリキュラム開発専門家	永田 智子	兵庫教育大学 教授	非常勤
海外交流アドバイザー	なし	なし	なし
地域協働学習実施支援員	久保 正彦	佐用町役場 職員	非常勤

9 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
コンソーシアム及び運営指導委員会					○		○				○	○
研究成果発表会											○	

(2) 実績の説明

- ① コンソーシアム及び運営指導委員会、研究成果発表会を通じた管理と指導・助言
 コンソーシアム及び運営指導委員会、研究成果発表会に高校教育課参事や担当指導主事を派遣し、大学・企業・関係機関関係者等の専門家と意見交換を図りながら、事業の成果と評価をもとに指導・助言を行った。
- ② 事業終了後の自走を見据えた取組について
 事業終了後、本事業の取組を持続可能なものにするために一定の事業経費を計上し、支援する

予定。

- ③ 高等学校と地域の協働による取組に関する協定文書等の締結状況について
締結を行っていない。

10 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間 (契約日 ~ 令和3年3月31日)											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①佐用の特産品を活用 (商品開発)			○	○		○	○	○	○	○	○	○
②佐用で暮らす人を守る (健康寿命の延伸)		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
③佐用の水害から学ぶ (安全・安心な町づくり)			○	○		○	○	○	○	○	○	○

(2) 実績の説明

- ① 研究開発の内容や地域課題研究の内容について

テーマの3本柱を基準に横断的なカリキュラムの開発を行う。

研究テーマ	実施科目名	連携機関
①佐用の特産品を活用 (商品開発)	食文化 (2学年) フードデザイン (1~3学年)	佐用町、ナニワフード、IDEC
②佐用で暮らす人を守る (健康寿命の延伸)	生活産業基礎 (1、2学年) 生活と福祉 (2学年) 課題研究 (3学年)	佐用町自治会、美作市スポーツ医療看護専門学校
③佐用の水害から学ぶ (安全・安心な町づくり)	総合的な探究の時間 (1学年) 課題研究 (3学年)	佐用町、山崎高校、日本調理製菓専門学校

- ② 地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け (各教科科目や総合的な学習 (探究) の時間、学校設定教科・科目等)

【佐用の特産品を活用 (商品開発)】

a 総合的な探究の時間 (1学年)

佐用町の調査研究を通じて地域課題を考える。「食」を中心に特産品・健康寿命・防災に関する知識・技術における基礎的能力の習得を図る。

- ・佐用町を知る「佐用学」での探究活動 (佐用町企画防災課職員による講話、タブレットを活用しての調べ学習) (5月~7月)

生徒の感想には、「佐用町に住んでいるが、新たな特産品などを知ることができた。」など、地域への興味関心が深まっていることが確認できた。

b 生活産業基礎 (1学年)

- ・商品開発におけるプロセスについての知識習得 (1月~1月)

特産品による商品開発において基礎知識を習得した。

c フードデザイン (1学年)

- ・「食」に関する基礎知識と基本的技術の習得、地元食材の「佐用もち大豆」を用いた料理やメニューの開発 (5月~3月)

・地元の保育所での食育活動（11月）

佐用町立利神保育所の園児が来校しての「食育クッキング」を企画していたが、新型コロナウイルス拡大防止のため中止となった。代替えとして、食育に関するおもちゃを製作・寄贈し、その製作物を通してコミュニケーション能力を高めた。

d 食文化（2学年）

・佐用町の特産物である夢茜トマト、佐用もち大豆を用いての商品開発やメニュー開発（5月～12月）

月に一度のペースで、佐用町企画防災課、保健福祉課、農林振興課、栄養士、農産物生産企業、商品製作企業の担当者と、校内で生徒を交えて商品開発会議を行った。会議の進行を外部的の方に委託することで、生徒の主体的な学びにつながった。本年度は、夢茜トマトを用いてトマトソースとトマトゼリーを、佐用もち大豆を用いてミックスパウダーを開発した。

・昨年度開発商品「夢茜トマトジャム」を「西播磨フードセレクション2020」に応募

一次書類審査を通過し、二次審査では生徒自身によるプレゼンテーションを審査員の前で行ったことにより、生徒に企画力や情報発信力、プレゼンテーション能力を身につけさせることができた。成果として金賞を受賞した。

・地域のワーキングスペースにて、研究発表会及び展示即売会（12月）

本年度の商品開発に関する研究成果発表会を行った。発表後、商品の即売会も行い、生徒はプレゼンテーション能力だけではなくコミュニケーション能力などの向上も見られた。生徒の感想には「実際に自分たちで開発したものが完売して嬉しかった。」「商品を開発した達成感を得られた。」など肯定的な意見が多く、自己有用感を育む機会につながった。

e 課題研究「食物」（3学年）

・佐用町社会福祉協議会との協働の「給食ボランティアサービス」の参画を通じた独居高齢者のサポート（5月）

本校調理室にて社会福祉協議会の職員の指導のもと、調理を行った。地元の食材を使用した献立を生徒自身が考案し、調理するとともに、お弁当のパッケージにはメッセージを付けるなどの工夫を凝らした。大量に調理する技術が向上し、ふるさとに対する誇りや愛着も深まっている。来年度は一方通行ではなく、双方向型の活動にしたい。

・子育て支援センター「ママプラザ」でのママ支援の食育活動（1月）

カフェの企画、地元食材を用いた幼児向けメニューの開発は行ったが、本年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、実施できなかった。

・平福にあるお休み処「瓜生原」での高校生カフェにて、地元食材を用いたお弁当の提供による地産地消啓発活動（12月）

地元食材を使用した弁当の献立を考案し、「佐用高校生カフェ2020」としてイベントを行った。地元住民や古民家職員との交流を通じて生徒はコミュニケーション能力や企画運営力を習得し、達成感を得ることができた。

【佐用で暮らす人を守る（健康寿命の延伸）】

a 総合的な探究の時間

佐用町の調査研究を通じて地域課題を考える。「食」を中心に特産品・健康寿命・防災に関しての知識・技術における基礎的能力の習得を図る。

・佐用町の抱える課題や要望などの調査計画（7月～3月）

・佐用町の水害についての調べ学習とポスターセッション（11月）

来年度実施の学校設定科目、「ヒューマンサービス」での「高校生訪問サービス」に向け

て、地域の課題をアンケートにて調査するための下地作りを行った。

b 生活産業基礎（1学年）

- ・生活産業とそれに関わる職業についての知識の習得（5月）

地域の求める人材をベースに、生活産業分野での職業について学習した。来年度実施のインターンシップに向けて、生徒は意識付けと知識の習得ができた。

c 生活産業基礎（2学年）

- ・家政科2学年の生徒全員が、一社一人体制で5日間の就業体験実習（インターンシップ）を通して地域の職業人に学ぶ（8月）

地域の企業でのインターンシップを行った。企業探しをはじめ、打ち合わせのアポイントメントなどを生徒自身が行うことにより「高校生訪問サービス」実施に向けた一助となった。

d 生活と福祉（2学年）

- ・播磨園やいちよう園を施設訪問し、レクリエーション交流を通じて、体力づくり啓発活動（2月）

新型コロナウイルス感染拡大により施設訪問を行うことができなかったため、生徒が録画したファッションショーを視聴してもらった。また、健康体操DVDも製作し、施設利用者に配布した。

- ・美作市スポーツ医療看護専門学校にて福祉・介護の専門知識の習得と実習（12月）

本年度は多くのイベントが縮小・中止になってしまったが、逆に時間の余裕が生まれたため、基礎固めをする好機と捉え、福祉に関する基礎知識や技術の習得に重点を置く計画に変更した。福祉の専門家による講義や講習を受けることにより、生徒の学力向上につながった。来年度の「高校生訪問サービス」や地元住民との合同防災訓練に向けて、知識の定着を図ることができた。

e 課題研究「被服」（3学年）

- ・地元の高齢者施設や佐用保育所、子育て支援センターの利用者に向けて衣装製作を行い、健康寿命の延伸を心と身体の間からサポート（9月～12月）

高齢者施設や子育て支援センター利用者に衣装を提供し、11月に行われる地域文化祭でファッションショーの共演を行う予定であったが、中止となった。代替えとして、各施設で動画や静止画の撮影を行い、合同ファッションショーPVの制作を行った。

f 課題研究「福祉」（3学年）

- ・きらめきケアセンター、朝陽ヶ丘荘、佐用保育所、での定期的な実習で、地域住民の生活サポートと実態調査（8月～10月）

保育・介護の班に分かれ、それぞれの施設で実習を行った。継続的な訪問を行うことにより、生徒は進路に向けての職業意識と専門技術の習得につながった。

【佐用の水害から学ぶ（安全・安心な町づくり）】

a 総合的な探究の時間（1学年）

佐用町の調査研究を通じて地域課題を考える。「食」を中心に特産品・健康寿命・防災に関しての知識・技術における基礎的能力の習得を図る。

- ・佐用町を知る「佐用学」での探究活動（佐用町企画防災課職員による講話、タブレットを活用しての調べ学習）（5月～7月）

生徒の感想には、「地域の現状をもっと知りたいと思った。」などのコメントがあり、地域に対する興味や関心を深める学びとなった。

- ・災害についての知識の習得（佐用町役場）（7月）

- ・佐用町の水害についての調べ学習とポスターセッション（11月）
佐用町の水害被害を知らない生徒が多くいる中で、昨今の頻発する災害に備えるためにも、防災についての基礎知識をしっかりと学習できた。次年度は、実際に防災訓練や災害食開発につなげる。
- b 生活産業基礎（1学年）
 - ・商品開発におけるプロセスについての知識習得（11月～1月）
- c フードデザイン（1学年）
 - ・「食」に関する基礎知識と基本的技術の習得、地元食材の「佐用もち大豆」を用いた料理やメニューの開発（5月～3月）
 - ・佐用町健康福祉課職員による災害食（パック調理）の研究（11・12月）
災害時に役立つ備蓄食について学習し一週間分の献立を考える中で、「限られた条件や食材の中で、献立を考えることの難しさを実感した。」などの感想が得られた。

【学校家庭クラブ活動】

学校家庭クラブの基本方針である「創造」「勤労」「愛情」「奉仕」の精神を柱として、地域に貢献する目的で「研究活動」「ボランティア活動」「交流活動」を行う。

- ・地元食材を用いた焼菓子の校内定期販売を通して、地域を活性化（6月～3月）
本年度は定期販売を中止した。代替えとして緊急事態宣言に伴う長期休業中に手作りマスクを製作し、約700枚を佐用町に贈呈した。
 - ・上月町、三日月町など地元主催のイベントにおける地元食材を用いた焼き菓子の販売活動を通じた地域交流（11月）
地元食材を用いた焼き菓子「朝霧紅茶ケーキ」や「ひまわりクッキー」を作り販売することで地域との交流を行った。
 - ・「兵庫県総合文化祭」での開発商品や特産物使用の皆田和紙アクセサリー販売を通じた佐用町のPR活動（11月）
- ③ 地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ、教科等横断的な学習とする取組について
- a 「課題研究（食物）」にて社会福祉協議会との協働で「給食サービスボランティア」の実施「フードデザイン」の授業内でお弁当の献立作成
 - b 「食文化」にて佐用町、企業との協働で特産品を使用した商品開発「総合的な探究の時間」の授業内で「佐用学」の講義受講
 - c 「総合的な探究の時間」にて防災学習「フードデザイン」の授業内で「災害パッククッキング」講習会実施
- ④ 地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制
校内組織のビジョン委員会、教育課程委員会、キャリア教育推進委員会と連携・協働して、「インターンシップ」や「ヒューマンサービス」等の教育内容、「高校生訪問サービス」「高校生カフェ」等の体験活動や探究活動の充実に向けた協議・検討を行い、地域を支えるプロフェッショナル人材を育成するカリキュラムモデルプランの構築推進に取り組んだ。
- ⑤ 学校全体の研究開発体制について（教師の役割、それを支援する体制について）
本事業を運営するため、校内組織に「地域協働部」を、校内委員会に「地域協働事業推進委員会」を新たに設置した。「地域協働事業推進委員会」は、本校教職員にカリキュラム開発等専門家及び地域協働学習実施支援員を加えた構成で、コンソーシアム内の「佐用風土（Sayo Food）」、健康福

社、防災教育推進の三つの小委員会と連携・協働して本事業の推進に取り組んだ。また、生徒の探究活動に対しては、全ての教職員が積極的に関わっていく。

⑥ カリキュラム開発等専門家、および地域協働支援員の学校内における位置付けについて

分類	氏名	所属・職	雇用形態
カリキュラム開発専門家	作野 広和	島根大学 教授	非常勤
カリキュラム開発専門家	永田 智子	兵庫教育大学 教授	非常勤
地域協働学習実施支援員	久保 正彦	佐用町役場 職員	非常勤

⑦ 学校長の下で、研究開発の進捗管理を行い、定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ、計画方法を改善していく仕組みについて

カリキュラム開発等専門家が、コンソーシアム及び運営指導委員会で事業担当者からの報告を受けながら、成果の検証・評価を行い、計画・方法の改善策を助言した。それを地域協働推進委員会において、学校長を中心に確認し、不十分に思われる部分については、委員会としてどのように改善するかを協議し、改善する仕組みで事業を進めている。

また、月2～4回、学校長に、事業担当者が研究開発の進捗状況や課題等を報告し、指導助言を受けながら、適宜計画内容の確認と見直し・改善を図っている。

⑧ カリキュラム開発に対するコンソーシアムにおける取組について

a 第1回コンソーシアム委員会

日時 令和2年8月5日(水) 14:00～15:30

場所 兵庫県立佐用高等学校 会議室

出席者 コンソーシアム委員、佐用町職員、佐用高等学校職員

指導助言

- ・食分野や高齢者、防災など、世の中のニーズに合ったテーマである。三本柱も工夫されている。特産品を使うのも良い。
- ・サポーターの組織化→外部講師以外で、移動の時のサポートなどカリキュラム運営に関わる人の協力を得る。

b 第2回コンソーシアム委員会

日時 令和3年2月6日(土) 11:30～12:30

場所 さよう文化情報センター 会議室

出席者 コンソーシアム委員、地域協働学習支援員、佐用高等学校職員

指導助言

- ・地元のケーブルテレビやYouTube 配信などを活用し、令和3年度の成果発表会の様子を地域の人に見てもらおうなどの工夫が必要。
- ・地域協働とは高校生が地域に接する、高校生が地域課題の解決の一助となるということだけでなく、高校そのものの在り方が問われている。
- ・事業に関わっている関係者の方々が、相互にメリットがあるように、高校の地域協働事業をきっかけとしてできる。(水平的連携)
- ・佐用で学び育った子供たちが佐用を支えていく小中高一貫カリキュラムが必要である。(垂直的連携)

⑨ 運営指導委員会等、取組に対する指導助言等に関する専門家からの支援について

a 第1回運営指導委員会

日時 令和2年10月20日(火) 14:30～15:30

場所 兵庫県立佐用高等学校 会議室

出席者 運営指導委員、地域協働学習支援員、佐用高等学校職員

指導助言

- ・カリキュラム開発や商品開発など、色々な開発という言葉が使われているが、その先にある開発が目的なのか、開発する力を身に付けさせたいのかが分からない。
- ・何が目的なのか、どのような力を身につけさせたいのか明確にする必要がある。
- ・生徒につけたい力を想定しながら様々な取組をしようと考えておられるが、もう一度、1つ1つの取組を実施する中で、生徒が身に付けられる力を整理していかなければならない。

b 第2回運営指導委員会

日 時 令和3年2月24日(火) 14:00~15:30

場 所 兵庫県立佐用高等学校 会議室

出席者 運営指導委員、地域協働学習支援員、佐用高等学校職員

指導助言

- ・「開発」の意味することについては、カリキュラム開発が目的だが、開発する力を身につけさせるという意味を含んでいるということが分かった。
- ・カリキュラム開発にあたっては、考えられることが全て計画書に盛り込まれていて網羅されている。
- ・内容にてんこ盛り感があり、充実した内容ではあるが時間的、労力的に限度があるのでは。

⑩ 成果の普及方法・実績について

a 「兵庫県総合文化発表会」にて研究成果の発表

1 1月に行われた「兵庫県総合文化発表会」において、特産品である皆田和紙を使用したキーホルダーやアクセサリーの販売を行った。また、地域との協働活動紹介パネルの展示も同時に行った。

b 瓜生原での「高校生カフェ」にて研究成果の発表

1 2月に行われた「高校生カフェ」において、地域の特産品を用いたオリジナル弁当の提供や焼き菓子の販売、また、地域との協働活動紹介パネルの展示も同時に行った。

c さよう文化情報センターでの発表会の開催

地元の施設を使って本年度の研究成果の発表会を行うことで研究内容を地域に還元し、次年度につなげる。(2月)

1 1 目標の進捗状況, 成果, 評価

① 目標の進捗状況

目標の3分野で身に付けさせたい力を考察し、一年目は探求基礎力の向上を目指した。

【特産品による商品開発】

1年	【探求基礎力】 ・ふるさと意識 ・表現力 ・プレゼンテーション能力 ・知識力	総合的な探求の時間	○佐用町による特別授業 ○佐用町についての調べ学習・発表
		生活産業基礎	○商品企画開発におけるプロセス学習
		フードデザイン	○食に関する基礎知識と技術の習得 ○幼児向け食育活動 ○各種コンテストへの応募

【健康寿命延伸に向けて】

1年	【探求基礎力】 ・ふるさと意識 ・プレゼンテーション能力 ・知識力	総合的な探求の時間	○佐用町の実態把握 ○モデル地区の実態調査計画
		生活産業基礎	○消費者ニーズ・商品企画に関する学習 ○職業についての調べ学習・発表

【災害に強い町づくり】

1年	【探求基礎力】 ・基礎的知識、技術 ・課題発見力 ・ふるさと意識 ・プレゼンテーション能力	総合的な探求の時間	○佐用学、防災学習
		生活産業基礎	○佐用町に求められる人材把握 ○防災関連商品開発プロセス学習
		フードデザイン	○災害学習、パッキング実習 →いずみ会、役場による講習会 →災害食調べ学習

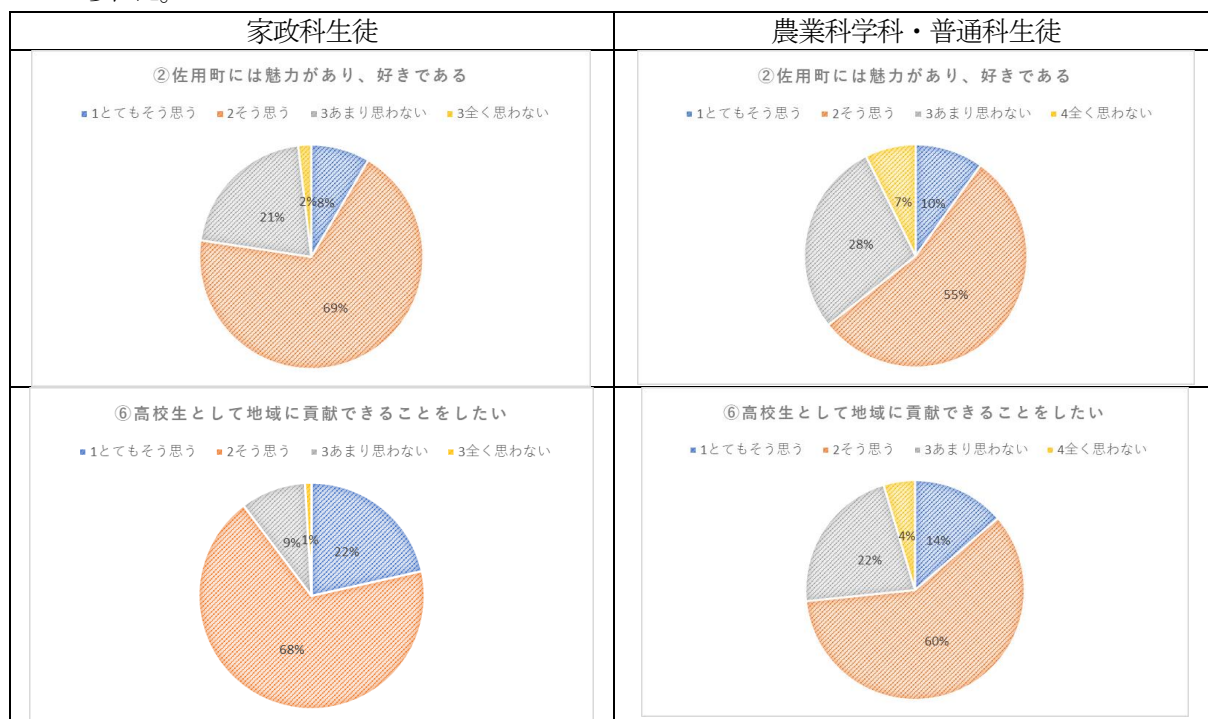
② 成果

a 具体的成果

- ・「佐用もち大豆コンテスト」で佳作に3名入賞
- ・「西播磨フードセレクション2020」にて開発商品の「夢茜トマトジャム」が金賞受賞
- ・「全国高等学校家庭科技術検定」にて食物調理・被服製作（洋服）・被服製作（和服）・保育の全てにおいて1級を取得し、四冠王を達成
- ・「色彩検定」受験者と取得者の増加

b 生徒の意識の変容

研究の成果で、生徒の意識調査を目的としてアンケートを実施した。家政科生徒、農業科学科・普通科生徒にそれぞれ若干異なる内容で実施したが、同じ項目の比較では、以下のような差がみられた。



佐用町在住者：佐用町外在住者の比率は、家政科が8：2、農業科学科・普通科が7：3で、家政科生徒の佐用町出身者は少ないが、地域に対する興味関心や貢献意識が高いことが分かった。地域と協働におけるカリキュラム開発の研究内容を授業に多く取り入れることにより、生徒は日々の授業の中で達成感を感じており、自己肯定感の向上もみられる。学校内外での取組が生徒の意識向上につながったと思われる。しかし一方で、卒業後に地元で働く意欲が6割ほどに留まっている。家政科の生徒だけでなく、佐用高校生全体としてのふるさとで働く意識向上が必要である。

c 評価

研究成果の評価として、生徒にはポートフォリオの作成やパフォーマンス評価、学力調査やアン

ケート調査などを通じて多面的な評価を行った。生徒に身についた力や感想等は各分野での実施報告にも掲載しているが、比較的能力は向上し感想も前向きな内容が多かった。

事業の実施に際しては、職員会議等での連絡・報告等を通して全職員の周知理解と情報共有を行い、生徒の探究活動に対して全ての教職員が積極的に関わっていく体制作りを推進した。全教職員の協力のもと、インターンシップや高校生カフェ等の体験活動や探究活動を実施し成功できたことは、その成果の現れである。

<添付資料>目標設定シート

1 2 次年度以降の課題及び改善点

一年目は、指定を受けたことにより地域協働活動を広げることを目標に計画を立てていたが、新型コロナウイルスの影響で逆に活動自体は縮小する形になってしまった。しかしながら、できる範囲で創意工夫をしながら、研究開発を進め、生徒の能力向上に努めてきた。生徒たちは、徐々に手応えを感じ、自信と有用感を持ち始めている。

事業の実施に際しては、職員会議等での連絡・報告等を通して全職員の周知理解と情報共有を行い、生徒の探究活動に対して全ての教職員が積極的に関わっていく体制作りを推進していった。本事業へ応募するにあたり、これまでの取組の見直しや、新学習指導要領に基づいたカリキュラム開発を行ってきた。その中で、生徒の「主体的・対話的で深い学び」につながる内容を吟味し、身につけさせたい力を明確にしてきた。コロナ禍で予測が困難な現状であるが、逆転の発想を持ち、現状の課題を見直す機会を持つことで、生徒の新たな発想を引き出し、課題解決力を身につけさせたい。

生徒の評価方法として、簡易なアンケートや授業を受ける前と後での意識調査を行うなどして、生徒の変容をきめ細かく確認することが課題である。

二年目となる次年度は、内容を充実させる年度にしたいと考えている。学校現場としてはカリキュラム開発を目的としていることから従来の学校設定科目からの変更を行うとともに、既存科目の内容について見直しなど新学習指導要領に沿ったカリキュラム開発を行う。

また、他学科・他教科との連携などカリキュラム・マネジメント体制の構築と、令和4年度からの新教育課程実施に向け、教育課程編成を協議・検討する中で、令和2年度での取組結果を踏まえ、普通科選択科目において家庭科と農業科の専門科目を新たに編成し、三学科が連携したカリキュラム・マネジメント構築に向けた取組をスタートさせる予定である。